

特集Ⅰ 私が選んだ外国映画歴代ベスト3

① 『ローマの休日』 米

② 『ニューシネマパラダイス』 伊・仏

③ 『街の灯』 米、『ショーシャンクの空に』 米

今号は、外国映画を対象に特集を組み、下記の方々にお願
いし、今までに最も印象に残った3作品を挙げてもらった。
年代も作品ジャンルも漠然としていて、幅広いため苦勞され
たようで、企画した編集部として恐縮している次第。

さて、回答結果からみると、圧倒的にアメリカ(米)作品
が多く、それにフランス、イタリアが続いている。日頃私た
ちは、ハリウッドのドンパチ映画をシニカルに見ている面も
あるが、さすが映画の殿堂、心に残る作品を多く残している。
選出作品は皆さんの豊富な映画歴を物語るように、様々なジ
ャンルにわたっているが、あえて絞り込むと冒頭の4作品に
なる。(③は同点2作品)編集部からの下手なコメントは避
けたい。次ページ以降の個別の選出内容を見ていただければ、
名作の映像が時空を超えて蘇ってきます。改めて今回の企画
に協力していただいた方々にお礼申しあげる。

【投稿依頼者】

池村英子	津のナチュラリスト	4	頁
伊藤英子	津市文化協会理事		
大杉 順	彼岸花映画祭津実行委員	5	
太田義幸	通りすがりの映画好き		
加藤恵子	四日市市文化協会会員	6	
志田行弘	三重TV相談役		
田中 忍	三重映画フェスティバル会長	7	
西松 優	日本映画研究者		
谷口 晃	脚本家	8	
長谷川哲也	三重映画フェスティバル		
藤田 明	映画評論家	9	
水野圭次郎	四日市☆映画祭スタッフ		
村上 暁	団体職員	10	
森松千恵	三重映画フェスティバル		
吉村英夫	映画評論家	11	
和田正則	ブックススペース「栄和堂」オーナー		
【シネマ游人】			
中村藤生	スタッフ	12	
林 久登	スタッフ		
堀川慶治	スタッフ	13	
森 次男	スタッフ		

池村英子

① 街の灯 チャールズ・チャップリン 1931 米

② ニューシネマパラダイス ジュゼッペ・トルナトーレ 1989 伊・仏

③ ローマの休日 ウィリアム・ワイラー 1954 米

① 心温まる人間性豊かなチャップリンの名作の中でも絶品。花売り娘の目を治そうと悪戦苦闘する浮浪者の自己犠牲愛、その涙ぐましい姿に涙は止まらない。溢れる愛は、この枯れた大地にもオアシスのように降り注ぐ。哀愁漂う音楽もチャップリン作。② 真つ青な海、白い建築物のシチリア島の風景。戦地に出た父を待つ家族。そんな映画少年トトと映画技師アルフレードとの友情、師弟愛。映画館の火事、命がけで助けるトトだが、アルフレードは失明。やがて故郷を離れるトト。父の戦死。アルフレードの死で再び故郷へ戻る。残されたフィルムを眺め、過ぎし日を懐かしむ。戦争の影が静かに潜む。エンリオ・モリコーネの繊細な旋律が美しく奏でる。③ 欧州滞在中に、こっそり抜け出したアン王女と新聞記者との、身分違いのかりそめの恋。真実の口、トレビの泉、古い歴史有るローマの魅力を存分に伝える。グレゴリー・ペックのスマートさと、清楚で可憐なオードリー・ヘプバーンに魅了された。

伊藤英子

① 風と共に去りぬ ヴィクター・フレミング 1939 米

② サウンド・オブ・ミュージック クロバート・ワイズ 1965 米

③ クレイマー・クレイマー ロバート・ベントン 1979 米

① は、戦後、マーガレット・ミッチェルの原作を一冊一冊出版されるのを心待ちにして読んだ。両親とその内容を話し合った思い出。俳優は名演、スケールの大きさ。なんといっても、ヒロイン、スカーレット・オハラ生き様が現代に通じる逞しさと共感する。② は、「愛と哀しみのボレロ」とどちらにするか迷ったが、夫がニューヨークへ長期滞在中、小学生の息子二人を連れて四日市まで見に行った。息子たちもその時のことを未だに語る。美しい音楽と反戦の思いのこもった作品である。③ は、大好きなメリル・ストリープの初期の作品。女性の自立と男性の生活・子育ての自立の問題を一つの家族の物語で現わした。日本では、現代の課題である。日本がどんなに遅れているか。女性の地位の低さでわかる。

大杉 順

① 街の灯 チャールズ・チャップリン、1931 米

② ウエスト・サイド物語

ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ、1961 米

③ ニュー・シネマ・パラダイス

ジュゼッペ・トルナトーレ、1989 伊・仏

三つ選ぶのは、大へんだけども、あえて幼少のとき観た無声映画①目が見えない花売り娘のために、無償で愛を与え続ける：最高のラストシーン、いかに愛というものが美しいか、それを見せたのが、映画一筋に生き抜いたチャップリンだ。1961年米国は、若きジョン・F・ケネディがすい星のように登場、強くて輝いていた。そのとき封切られたミュージカル映画②は、よりによって、そのアメリカの恥部である人種差別・貧困・世代の断絶という社会問題をテーマにしていた。なんと自由の国、ただ新鮮で刺激的だった。もう一つ、何度も、何度もこの映画が上映されるたび観たのが③。映画を愛する人々のために、映画館に身を捧げた男の物語。この監督は、子供時代の無邪気さと好奇心、初恋の苦惱、希望、幻滅、喜びといった、人生すべての感情を与えてくれる。

太田義幸

① ローマの休日 ウィリアム・ワイラー 1954 米

② シュリ カン・ジエギユ 2000 韓

③ エス オリヴァー・ヒルシュビゲル 2001 独

①最後の謁見のシーン。「大丈夫かい？」とのまなざしをおくるジョーに対して、気丈にうなづくアン王女。でも、やっぱり本当は離れたくないと、わずかに、ほんのわずかに首を横に振るアン。何度観ても名シーンである。②朝鮮の南北問題という現実のシビアな問題を扱いながらも、恋愛もからめて一級のエンターテインメント作品に仕上げている。そのシナリオ、アクション、カメラワークなど、これほどの作品がお隣の韓国で作られたことに、日本の映画関係者は度肝を抜かれたことでしょう。③私にとって、今まで観た中で最も怖かった映画。バイト代欲しさに集まった人たちを看守役と囚人役に分けたらどうなるかという実験。最初は談笑していたのに、次第に看守役は高圧的に、囚人役は卑屈になっていく。環境と役割分担を与えるだけで、人間がこんな思考になるとは。スタンフォード大学で実際に行われた実験をベースにつくられた作品。あー、恐ろしい。

加藤恵子

- ① サウンドオブ・ミュージック ロバート・ワイズ 1965 米
- ② ドライビング・ミス・デイジー ブルース・ベレスフォード
1990 米
- ③ ひまわり ヴィットリオ・デ・シーカ 1970 伊・仏・露

①は、ザルツツブルグで家族コーラスの公演をするトラップ一家のサクセス・ストーリー。ナチスの手を逃れ、自由の国へとアルプス越えするシーンにハラハラ、ドキドキしながら、ジュリー・アンドリュースの可憐さに胸キュンとなったのが、昨日のことのように思い出される。アメリカ映画のミュージカルにはまってしまい、挿入歌の「ドレミの歌」をいまも口ずさんでいる。

②は、黒人運転手と、雇い主であるユダヤ系老婦人との心温まるやり取りが、絆としてかけがえないものになっていく。そのプロセスをユーモラスに描きながら、舞台となったアメリカ南部の人種差別にも焦点を当てている。③は、戦争に翻弄される男と女の愛を、これほどに哀切に演出するデ・シーカのネオ・レアリズモに脱帽。マンシーニの音楽にもしびれたが、残酷なくらい明るい地平線まで続く一面のひまわり畑は、圧巻としか表現できない。

志田行弘

- ① 心の旅路 マーヴイン・ルイス 1942 米
- ② 荒野の決闘 ジョン・フォード 1946 米
- ③ さよならをもう一度 アナトール・リトヴァク 1961 米・仏

①R・コールマンと、G・ガースン主演による記憶喪失という特異なテーマを駆使して男女の一途な献身愛と慈しみの心を描いた珠玉の名画。最後に2人が期せずして昔に暮らした古家で一本の鍵が心の再会を果たす感動には涙、涙である。②H・フォンダ扮するワイアット・アープ保安官とV・マチュアのドッグ・ホリデイが織り成す激しい闘魂と男の友情がいい。動の『駅馬車』に対し静の『荒野の決闘』と言われる。最後に、「私はクレメンタインという名前が一番好きです」と思慕を告げて去る姿も男らしい。③は、「バーグマンとI・モンタンの分別ある二人の間に入り込む、若い青年A・パーキンスが好演。原作はF・サガンの「ブラームスはお好き」で、全編に第三楽章が流れる。去りゆく青年に、「私はもう若くないの…」と泣き叫ぶラストシーン。

田中 忍

- ① ローマの休日 ウィリアム・ワイラー 1954 米
- ② ステイング ジョージ・ロイ・ヒル 1974 米
- ③ サウンド・オブ・ミュージック

ロバート・ワイズ 1965 米

これらの作品は、私が10代の頃に観た。今と異なり、娯楽も限られ、私の多感な時期に強い印象として植え付けられたため、自分の宝物のように大事にしている、40数年たった今でも、このベスト3は変わっていない。①オードリー・ヘップバーンのチャーミングさ。アン王女の冒険を皆が見守る周囲の温かさが愛おしい。テンポのよいストーリーで、今観ても褪せていない。わが生涯のベスト1作品である。②イキのよい大人の映画で、ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォードの格好よさは最高！憧れの的だった。スコット・ジョプリンが奏でるラグタイムにうっとりし、サントラLPを擦り切れるほど聞いた。③初めて見たミュージカル映画。ジュリー・アンドリュースの素晴らしい歌声と日常生活の中で繰り広げられるダンスシーンに驚き、映画はこのようなファンタジーを紡ぎ出せることが発見できた。

西松 優

- ① ライムライト チャールズ・チャップリン 1953 米
- ② 市民ケーン オートソン・ウエルズ 1941 米
- ③ 道 フェデリコ・フェリーニ 1954 伊

映画①は年を経るにしたがい心に沁みってくる。定年退職後大学の聴講生となり「チャップリン」の講座を受講した。

映画館のような大講堂のスクリーンで、多くの女子大生達と一緒に見たこの映画の感動は、今も忘れられない。映画を真摯に見ようとする若者達との「感動」の「一体感」・「連帯感」は格別だった。

この映画ではチャップリンの人生観が随所で語られ、私の老後の生き方の糧になってくれる。「人生は恐れるに足りない。人生に必要なもの。それは勇気と想像力、そして少しのお金だ。」「命ある限り最善を尽くさなきゃ。」「人生は願いだ。願いたいことすべてだ。」等「心の持ち方」の大切さを教えてくれる。音楽も素晴らしい。対極にあるのが②だ。絶大な権力と莫大なお金だけでは幸せになれないことを示す。③はストーリーも素晴らしいが、哀し気な音楽とジェルソミーナ役のジュリエッタ・マシーナの名演技が心に残る。

谷口 晃

- ① 刑事ジョン・ブック・目撃者 ピーター・ウイア 1185 米
- ② 浮き雲 アキ・カウリスマキ 1996 フィンランド
- ③ 髪結いの亭主 パトリス・ルコント 1990 仏

① 未亡人のレイチェルは、息子サミュエルと宗教的集団のアーミッシュの村で暮らしている。ある日、二人は親戚の家に行くが、サミュエルがトイレで殺人を目撃する。殺されたのは刑事であり、ジョン・ブック（ハリソン・フォード）が捜査にやってくる。ジョンとレイチェルの恋が美しい。② レストランがつぶれ失業した妻と、鉄道を首になった夫の物語である。世界中多くの地域が不景気でリストラの嵐が吹き荒れている。フィンランドも例外ではない。でも優しい気持ちにさせてくれる。自己主張をしないが静かな感動が胸に広がる。③ アントワーヌは子どもの頃からの夢であった床屋のマチルドと結婚する。幸せな日々が過ぎて、マチルドは、突然の雷鳴、雨が激しく降りしきるなか、店の中でアントワーヌを求め、飛び出し、悲しそうにアントワーヌを見詰め、激流に身を投げる。「あなたが、わたしに飽きる前に死ぬわ」というマチルドの置手紙……。

長谷川哲也

- ① 十戒 セシル・B・デミル 1957 米
- ② クオ・ヴァデイス マーヴィン・ルロイ 1951 米
- ③ エル・シド アンソニー・マン 1961 米・伊

① は旧約聖書の出エジプト記（今から約3300年前）をもとにした作品。火の柱がエジプトの軍勢をさえぎる、二つにわれる海、十戒が岩に刻まれていくシーンなど、見せ場も凄いが、物語の展開もしつかりしていて明快である。スペクタクル映画の大御所デミルが集大成の域に達した作品といえる。② は帝政ローマの時代（1世紀中頃）、皇帝ネロによるローマ炎上とキリスト教徒迫害を縦系に、軍団長と退役軍人の養女の純愛を横系に描いた作品。ヒロインを演じたデボラ・カーの端正な美貌が印象的。また、イタリアのチネチッタ及び周辺で一大ロケーションを敢行。③ は11世紀スペイン救国の伝説的英雄エル・シドの半生をチャールトン・ヘストンが熱演。特に、白馬にくくりつけられたエル・シドの遺体が敵を蹴散らせて、海岸遠くへと消えていくラストシーンは感動的である。